

令和4年度 博物館施設 総合評価

施設名 自然の博物館

		達成	未達	達成見込
全館共通	数値目標による評価	0	4	-
各館独自	数値目標による評価	7	0	-

		完了A	課題有B	未着手C
全館共通	チェックリストによる評価	84	6	0
各館独自	チェックリストによる評価	14	2	0

自己評価総括

評 価	<p>ア 令和4年度は感染防止の為の臨時休館やイベントの中止は無かったものの、来館者の外出自粛や、混雑時の入館者数制限などから新型コロナウイルス感染の影響が見られており、アウトリーチを含む利用者数は3月末現在70,593人、観覧者数は3月末現在68,757人となり、コロナ禍まえの水準には戻らず、目標値11,2100人の達成には至らなかった。</p> <p>イ 来館者アンケートでは、常設展・企画展・特別展及び自然観察会・講座等の満足度はいずれも95%以上となっており目標値を達成することができた。魅力ある分かりやすい展示を始め、丁寧な来館者対応、HPやTwitter等による積極的な広報活動を継続して実施した。また、11月の入館者350万人達成記念アンケートプレゼント企画や、秩父地域鳥瞰図クリアファイルの作成など来館者に楽しんでいただく取組みを実施してきた。</p> <p>ウ 観覧料および事業等収入額は、観覧者の増加が図られない中、展示解説書の見本の配架や、クリアファイル作成などによる物品収入の確保ができたことから目標を達成することができた。</p> <p>エ 博物館の重要な使命の一つである資料管理は、令和2年度から年間一万点を目安に計画的に点検を行い目標を達成することができた。計画的な資料点検が定着できたことの意義は大きい。しかし、全資料の点検終了までに長期間を要するため、重点化を図り迅速に取組む必要がある。</p> <p>オ 学校団体の利用については127校で目標値を達成することができた。しかし、コロナ禍前の水準には至っていない。今後、受け入れ方法や体制の見直しや、学校のニーズに対応した取組みを行っていく必要がある。</p> <p>キ ツイート数は、積極的な情報発信を年間をとおして継続し、目標値を達成することができた。また、HP閲覧回数約85万回、Twitter表示回数約700万回を得ることができた。</p>
--------	---

課題	<p>1 資料の収集・整理・保管 ア 平成2年度から「館有資料所在点検実施計画」に基づき収蔵資料点検を計画的に実施しているが、従前の計画では、全資料の点検終了までに長期間を要するため、重点化を図り迅速に取り組む必要がある。 イ 現在、自然系標本を積極的に収集してきた世代が高齢期を迎えており、学術的価値を有するコレクションの寄贈申出が多い状況にある。新規資料を受入れるためには、効率的な収蔵方法を検討するなど、収蔵スペース確保に取り組む必要がある。</p> <p>2 資料を活用した情報発信 ア 生物系資料についてはGBIF等を通じて資料のデータベースを公開してきたが、取り組みが不十分である。 イ 資料のデジタルアーカイブ化に十分に取組めていない。 ウ 学説の変化や新収集資料を反映させた常設展示更新を計画的に進める必要がある。</p> <p>3 学校教育との連携 ア これまで出張授業や体験学習支援を積極的に行ってきたが、学校からのニーズに十分応える体制が整備できていない。受け入れ方法や体制を見直す必要がある。 イ 学校授業で活用できるコンテンツ(動画・貸出用標本等)開発など、新たな学校教育支援の在り方について検討する必要がある。</p>
対応の方向	<p>① 計画的な資料整理の重点化(取組み期間:令和5~9年度) ア 館有資料所在点検実施計画の見直しと実施(年間:26000点) イ 収蔵スペースの確保 配架の見直し等による効率的な収蔵方法の検討と計画の具体化</p> <p>② 資料活用促進のための環境整備(取組み期間:令和5~9年度) ア データベース公開方法の検討(GBIFやジャパンサーチ等の活用方法を検討) イ 資料画像化方針の策定と画像化の実施(500点) ウ 常設展示更新計画の具体化</p> <p>③主体的・協働的な学びの視点による学校との連携の拡張・深化(取組み期間:令和5~7年度) ア 出張授業や体験学習支援の受入方法や体制の見直し イ コンテンツ(動画・貸出用標本等)の開発(企画広報・自然担当でチームをつくる・体制づくり)</p>

評価結果に対するコメント

各館協議会・委員会
の意見

- 制約がある中達成できなかった目標もあるが、概ねできることを適正に努力して事業を進めている。
特に、資料の所在確認を定常的に行っているのはとても良い。
とかく、入館者数や整理の済んだ資料点数の数字が独り歩きをしがちだが、資料と台帳やデータベースとの整合性を取る作業はとても大事なことだ。
また、二つの特別展は、どちらも埼玉県自然史に興味をもたせるよいテーマで、他の施設ではできない県立博物館として取り組むべき課題を達成していると思う。
- 博物館利用者数に関して、目標未達だが、新型コロナの影響が大きく、このような短期的な数値に博物館活動が左右される必要はない。
ただ、過去数年間の数値を比較して(コロナ期は例外)、今後の活動の参考にするのは必要である。
利用者の満足度が高いことは高く評価できる。
より本質的な意見だが、博物館活動の決め手は①学芸員の独自の調査研究に裏打ちされた社会教育活動と②博物館コレクションの量と質だと思っている。
前者に関しては、学芸員の地位を研究教育職に格上げすることが必須であり、この点で貴博物館の体制は非常に劣っていると言わざるを得ない。
後者に関しては、収蔵庫の拡張を視野に入れた長期計画が重要であり、毎年の予算請求と現資料の状態の把握や整理の促進などが必要である。
- 地域の特色を生かした特別展・企画展や自然史講座・観察会を継続的に開催し、100%に近い利用者の満足度を得られたことは、職員の不断の努力の結果であると高く評価する。
特にインターネット等を活用して積極的な情報発信に努めた結果、6000件を超すツイート数に達した点は評価に値する。
日頃の職員の積極的な取り組みが、目標値を超過する研究成果発表が行われたことに現れている。
- 利用者・観覧者の数が伸び悩んだのはやむを得ない。
反面、待ちの姿勢でない内部の努力が成果を上げられる分野、特に資料の点検・収集が予想以上に伸びたのは大変結構なことである。
今後は、それらのデータベース整備・公開などの拡充をいかに効率良く行っていくかが課題であろう。
資料の増加に伴って、空きスペースをいかに少なくするかという現存の設備の改変は特に急がれるし、増・改築が望めないなら、使われなくなった公的建物を資料室として利用することも考えておく必要がある。これは、どの博物館も頭を悩ます重大な問題である。
- コロナ禍が続いていたことから、利用者数が目標値に達しなかったことは止むを得ない。
しかし一方で、参加者の満足度や資料の収集整理、研究成果の発表等は十分に達成されており、高く評価してよい。
また、詳細なチェック項目の大部分が評価Aである点も評価できる。